

古石篤子

慶應義塾大学名誉教授

湘南藤沢学会 「研究助成基金」 成果報告書

活動の名称：「日本における複言語意識の涵養～小学校から大学まで」

活動の目的：

現在の日本の外国語教育は英語のみが強調され、文部科学省の現在の施策や検討中の今後の学習指導要領案などを見るに、その傾向はますます強くなる様相を呈している。またメディアもその傾向を助長している。その結果、英語ができさえすれば「グローバル人材」であるかのような言説がまかり通っている。しかしながら、それだけでは現実に国内外で多くの日本人が既に直面しているはずの、言語・文化の異なる人々との共生という課題の解決はままならない。この状況を打開するためには様々な地道な草の根的な活動を通じての、人々のマインドセットの変革が必要である。今回は小学校と大学に焦点を絞った。

活動の概要：

活動は主に次の(1)(2)であった。

(1) 講演会主催：「大学教育の国際化と英語」

日時：2014年11月27日（木）18時30分～20時30分

場所：日仏会館 501号室

講師：Claude Truchot（クロード・トリュショ）（フランス・ストラスブール大学名誉教授、専門分野は社会言語学、言語政策論、英語学）

コメンテーター：河添 健（慶應義塾大学総合政策学部 学部長）

司会・通訳：古石篤子

<講演会概要>

開催の趣旨は次の通りである。現在日本でも多くの高等教育機関（大学）において、「国際競争力をつけるために」英語による授業の設置が推進されている（例、「グローバル5大学」、「グローバル30」、「スーパーグローバル大学」等）。だが、そのもたらす功罪については残念ながらこれまできちんとした議論はなされていない。多くの関係者がメリットと同時にデメリットも感じている今、一度きちんと議論を喚起し、問題を様々な角度から整理して検討し、日本の高等教育機関にとって「真の国際競争力」とは何かを考える必要があると考えた。そのために、日本フランス語教育学会の招きで来日中（大阪府立大学、京都大学で講演）のTruchot氏を関東圏にお招きして、日仏会館にて一般公開の形で講演会を行った。

Truchot氏を招いた理由は、フランスでは2013年7月に「高等教育と研究に関する2013年7月22日付no.2013-660法（通称Fioraso法）」が公布され、この法律の第2条では高等

教育機関での使用言語について詳しく定められているが、この法案の審議過程では国会の内外で様々な激しい議論が展開されたからである。

日仏会館では 20 数名の参加者を得て、ラウンドテーブル形式の講演会とした。まず Truchot 氏に高等教育の英語化についてご講演いただき、その後、実際に GIGA プログラムなど、英語による授業が多く展開されている慶應義塾大学総合政策学部長河添教授から日本の現状についてのコメントをいただいた。それらの後、参加者からも多くの質問が出て、活発に質疑応答が行われ議論を深めることができた。この際の議論については、今後何らかの形での出版を検討している。

(2) 小学校での多言語活動実施

日時：2015 年 2 月 21 日（土）8 時 10 分～11 時 30 分

場所：横浜市立幸ヶ谷小学校

<多言語活動概要>

幸ヶ谷小学校では毎年 2 月の土曜日に「ハッピー&スマイル・デー」という名称の行事がある。これは児童が学外の様々な講師の提供するワークショップに自由に選んで参加する行事であり、キャリア教育の一環と位置づけられている。この行事に 2012 年 2 月から多言語活動が入った。（校長が前任校で多言語活動を大規模に実施した経験があるため。）2014 年は大雪のため中止となったが、今年で 3 回目である。1 回目と 2 回目はフランス語・朝鮮語・日本手話の 3 言語を行ったが、今年は学校からの要望で、地域性を考慮して朝鮮語の代わりに中国語が入った（中華街が近い）。講師は SFC 卒業生や SFC 学部生・大学院生等も含んだ全 8 名で、フランス語と中国語は 3 名ずつ、日本手話は 2 名が担当した。また学年とコマ数は、フランス語と中国語は高学年、日本手話は中学年の児童を対象にそれぞれ 2 コマずつ行った（のべ全 6 コマ）。希望者は各クラスとも 20 名前後（のべ全 120 名程度）であった。

この活動の目的は、児童に日本語と英語以外の言語に触れて、言語や文化に対する視野を拓けてもらうことであった。本来多言語活動はもう少し多い時間数（30 時間ほど）を連続して行うことによって、児童生徒のメタ言語能力および態度に影響を与えられるはずのものであるが、いかんせん、1 コマ 1 時間では、実質的に計測可能なほどの影響は見ることができなかったが、それでも終了後のアンケートでは、日本語や英語以外の言語に触れた新鮮な喜びやそれらの言語を学んでみたいという意欲が感じられた。来年度以降にはぜひもう少し長い期間実践できる学校を見つけたい。

また、2013 年 11 月の SFC の ORF において行った多言語活動について考えるシンポジウムの中味をリサーチメモとして刊行した。この種の活動の意義を広く伝えるのに活用したい。

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/list2014.html>

以上。

